

令和7年度第1回乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会
議事要旨

1 開催日時

令和7年8月18日(月) 10時30分～12時

2 開催場所

広島市役所北庁舎2階 第一会議室

3 出席者等

(1) 学識経験者・教育関係者・関係団体代表者

朝倉 淳【座長】(広島大学 名誉教授)

徳永 隆治 (安田女子大学教育学部児童教育学科 教授)

渡邊 英則 (認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園 園長)

伊藤 唯道 ※1 (広島市私立保育協会 副理事長)

堂山 宗敬 ※2 (広島市私立幼稚園協会 副理事長)

宮地 明美 (広島市保育園長会 会長)

木村 みゆき (広島市立幼稚園長会 会長)

築地 陽子 (広島市小学校長会 副会長)

※1 福島 ニール 圭治様(広島市私立保育協会 理事長)欠席のため代理の出席

※2 オンラインによる出席

(2) 事務局(広島市こども未来局・広島市教育委員会事務局)

幼保企画課幼保連携推進担当課長、幼保企画課保育園運営指導担当課長、
教育企画課長、指導第一課長補佐、特別支援教育課長、教育センター主任指導主事

4 議題(公開)

- (1) 令和7年度乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会について
- (2) 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

5 傍聴人の人数

なし

6 懇談会資料名

- ・ 令和7年度 乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会の開催について(資料1)
- ・ 本市における「幼保小の架け橋プログラム」の促進のための体制(資料2)
- ・ 令和6年度第2回乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会における御意見と令和7年度の取組内容(参考資料)
- ・ 乳幼児教育保育支援センターだより
- ・ 架け橋だより

7 出席者の発言要旨

事務局の説明に対し、以下のような意見・質問等があった。

※ ○は学識経験者・教育関係者・関係団体代表者、●は事務局職員の発言を表す。

(1) 令和7年度乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会について

○ 特になし

(2) 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

- 幼保小合同研修会の研修後のアンケートの結果について昨年度の懇談会でも報告を聞いているが、研修後に、園や学校が実践してみたことなどについて、その後、アンケート等で調査しているのか。

研修を受けると十分な理解が進み、自分に置き換えて考える等の成果があると思う。実際それを現場で活かしていくことについて、どのように思いをもっているのか、考えているのか知りたい。

- 研修後のアンケートは行っているが、フォローアップのようなアンケートはしていない。実効性を高めるためにそのようなことについても考えていきたい。

- 自身の小学校区では、取組がよい方向に向かってきている。小学校が園見学をする際には、小学校区内にある他の園にも来てもらい、こどもと一緒に見て、その後、協議の時間を30分程度設けている。その積み重ねができ、今年は特に良くなってきた。

今年は、私が小学校に出向き、今の園ではどのようなことをやっているのか、何が違うのか、学校とどのように理解が違うのかについて、1時間程、全職員に話を聞いてもらい、小学校職員の理解が変わってきたように感じる。

全体の課題として、小学校側からは、園により保育観に違いがあり、やっている内容が違うのではないかという意見がある。園側からは、小学校が変わってくれない、小学校がやってくれないという意見があり、園も一緒に変わっていくという感覚が低い。学校だけではなく、園も一緒に進めていく、協働していく意識が薄い。他に、継続的な取組みのこと、校長が変わったら変わることに、学校教員により理解の差が大きいこと等があり、とても理解がある先生もいれば、担任が変わると、ゼロに戻ってしまうこともある。そして、学校の先生が忙し過ぎて、話し合いの機会がなかなかもてない。

それらをどうしたらよいのかについての提案となる。1点目は、園と各園、就学前施設が、同じ方向に向かっていくため、もちろん、指針、要領等では同じような方向に向かっていくが、分かりやすく広島市の保育・教育がこれからどうしていくのか、何を大切にしているのか、どの方向を目指しているのかについて、はっきりしたほうがよい。広島市には、「広島市教育大綱」があるが、就学前のことに関しての記述が少ないので、もっと広島市の幼児教育として大切にしたいこと、こどもの学び等について定めていけたらよい。横浜では、「よこはま保育教育宣言」で、こういう方向でいくというものが決められている。そういったものができないだろうか。

2点目は、先程述べたとおり、園が地域の当事者として小学校に関わっていないこと。これは園の問題。もちろん、研修会なども必要だが、文科科学省が推進しているコミュニティスクール、学校運営協議会制度にもっと園が参加し、一緒に作っていくという方向になればよい。園が、その協議会のメンバーから外れている地域もあると聞いている。もちろん校長がメンバーを決めるので、仕方がないが、そのような場に地域にある園がしっかり入るような制度にならないか。このことにより、個人の熱意や情熱ではなくても、地域として、そういう制度として、小学校と一緒に作っていく方向になればよい。

3点目は、継続的な取り組みとして行うために、今年は、幼保小に係る研修会があるので、そういうのを使い、同じ方向に向かっていきたい。

4点目は、学校教育間の理解、教員間の格差のところ。乳幼児教育保育支援センターが全区で行う研修は、よい研修であり、とても効果がある。できれば、全ての職員がそのような話を聞けるよう、就学前は何をやっているのか、どこが一緒にどう違うのかを理解できるような研修をやってもらいたい。

最後に、対応の時間が少ないこと。小学校の先生は、忙し過ぎる。できれば小学校に、もっと職員を入れてあげることができればよいと思う。近隣の小学校は、昨年度まで働き方改革のモ

デル校になり、かなり変わってきた。小学校の先生に少し余裕ができ、そうすると、就学前施設と話してみようと意識を向けてくれる。学校の働き方改革も同時に進めてもらえたらよい。

- 幼保小の接続に係る講話は小学校と保育園の全職員が参加したのか。
- 夏休み中に小学校の全職員に聞いてもらい、当日、欠席した職員には動画を視聴してもらった。園の職員は参加せず、小学校の先生に対して、就学前に何をやっているかを理解してもらう内容で話した。
- 小学校区により、実態や状況、地域性が様々あると思う。昨年度から小学校長会等色々な場で、幼保小接続について話をしたところ、少しずつ理解が広まってきていると感じている。これからも継続して、取組等について伝えていきたい。
- 広島市の小学校の全教員対象に、幼保小連携の課題について、大規模調査、アンケートを取ったことがあるか。
- 教育委員会から、全小学校に調査しているものはない。
- 校長に取りまとめを依頼したものではなく、各学校単位で課題についてのアンケート調査というイメージになるのか。
- 令和7年3月に任意で小学校長宛てに依頼し、現状を教育委員会が把握するために行った。試行的なアンケートになる。
- 幼保小連携の課題について、連携が課題なのか、それ以外の要素なのか、ぼやけている印象がある。例えば、早生まれのこどもが小学校 1 年生の教科教育についていけない問題があり、小学校 3 年生ぐらいになって解消されると言われている。1 年生になった段階で、3 月生まれと 4 月生まれでは 1 年ぐらいの差がある。それについては色々なやり方で支援していくことが大事だと思うが、そういうものは、幼保小連携がうまくいくと解決できる課題なのかどうか。それぞれの事象について精査し、課題解決に向かう際には、幼保小連携が原因なのか否か、そういったところについてミクロの分析を始めてもいいのではないか。
次に、1 つ 1 つの課題が出され、その対処について話し合いをしている段階だと思うが、体系的に整理をし、原因を特定し、課題解決に向かっていくとよいのではないか。
質問となるが、資料「外国にルーツをもつこどもへの支援」、「障害のあるこどもへの支援」は、広島市乳幼児教育・保育ビジョンの中で述べていることだと思うが、保護者の視点から、幼保小連携について示唆、情報提供しているのか。
- 保護者の視点ではないが、冊子は園と小学校をつなぐことについて記載している。
- 幼保小接続は施設間だけのことだけではなく、地域や家庭も一緒に巻き込んで、こどもの経験について模索していくのがよいのではないか。保護者の視点もあればよい。
- 今、一人一人の育ちを支える環境、教育の連続の必要性について色々な角度から議論されている。頭で分かっているが、各施設、現場、保護者の立場、こどもの立場から考えた時、全てが繋がることはどういうことなのかについて真剣に考えていかなければ、これは難しい問題であると思う。
幼稚園教育要領改定に向けて、中央教育審議会「教育課程企画特別部会」が開催され

ている。その資料を見ると、乳幼児期からの主体的な遊び等、身近な環境に働きかけての探索、探究を通じた活動による学びが小学校以降の基盤になっていくことを具体的に示す必要があるという意見、多種多様な施設形態、実践があり、質の高い幼児教育について理解が不十分なまま幼保小接続が留まる可能性もなきにしもあらずという意見があった。

その対処については、今持っているものを最大限に生かしていく、広げていく、各施設の違いがある部分も、互いに共有、公開し、こどもの側から教育の連続性について精査していかないといけないと感じている。

架け橋だより 3 ページ、「幼児教育・保育はどのようなものか」の質問に対して、「ある程度自立した生活を送れるよう、支える」、「コミュニケーション、集団での体験を通して、周囲の人との関わりを学ぶ」とある。実践現場からすると、もう少し豊かなことをやっている。一人一人の成長や月齢差はあるが、自己実現、自己肯定感を高める体験の積み重ねを一生懸命追求するのが探索、探究であり、生活・遊びである。そのことを伝えていく必要があると感じた。就学前が大切であり、今後、不測の事態が想定される時代を生きていくこどもが、今、経験するべきことは、単に集団生活を生き抜いていくということではなく、何を経験させなければいけないかということ。そのことについて校長先生・園長先生で共有していく必要があると感じた。

- 参考までに、保護者向けについては、文部科学省も保護者の理解をどうにかしなくてはという思いがあり、保護者向けに「遊びは学び、学びは遊び、やってみたいが学びの芽」という動画をつくり、YouTubeで配信している。

- 色々な資料が作成され、それが家庭に届くかどうかということが今後の課題だろう。

- 架け橋だよりの内容では、明らかにベテラン教諭と新任教諭の違いがあり、これを、どう改善していくのかが課題だろう。たよりは、各学校にも届けているのか、紙なのか、電子媒体で一斉に配布されてるのか。

ベテランと新任の違いを少しでも解消していくためには新任の先生にどのように教育するのが非常に大事となるが、幼保小連携の合同研修会は、1 年生担任の先生は必修なのか、自由参加なのかについても教えて欲しい。

- 架け橋だよりは、作成したものをPDFにし、電子媒体で全校に送っている。

- 新任の先生や初めて 1 年生を担当する先生に対する研修についてはどうか。

- 初任者研修では、幼保小接続に係る内容について、共通の研修としては実施していないが、資料2のとおり、初任者の課題に応じた研修の中で他校視察があり、幼稚園、保育園を視察し、研修をしているものもある。特に、小学校1年生を担当している初任者は、幼稚園や保育園に視察を行うことが多い。今後、初任者を指導する先生「初任者研修指導教員研修」において他校種視察の事例を紹介しながら促していきたい。

- 小学校の状況によるが、1年生の担任に、新任者になることはあまりなく、何年か経って初めて1年生を担当する場合が多いようである。その際に、1年生担任の先生が、幼保の保育・教育の状況を知っていることは大事になる。初めて1年生を担当する先生を対象とした研修があってもよいのではないか。

教員養成課程を終えた学生がすぐに1年生を持てるかというとそうではなく、一定の教員としての経験を得ると共に、就学前のこどもの実情について学びがあって初めて 1 年生を受け持つことができるのだと思う。そう考えると、架け橋だよりを教員養成校にも配信してもらい、卒業間近4年生に見せたいというふうに思うが可能か。

● 市内の養成校に送付することについては、学校と相談したい。

○ 横浜市では、1年生を担当する先生を対象とした研修を行っているのか。

○ 小学校ではなく、幼稚園と保育園の新任者を対象にしている。幼保小接続の研修としては、関係者が夏に事例を持ち寄って行う研修や、小学校の先生の希望者が参加できる研修があるが、1年生を担当する先生が必ず受ける研修ではない。

○ 小学校は6学年あるため、初めての学年を担当することは沢山ある。校内では、同じ学年の中で人材育成を兼ねて研修し、積み重ねていくため、1年目、2年目、3年目と経験差はあるが、校内で何もしていないわけではない。

○ 横浜市の話となるが、若い先生は柔軟で、ベテランの先生のほうが硬いということはある。こどもの主体性を生かし、こどもの声を聞こうとする若い先生はいるが、上手に教科書を教えることができる先生は、どちらかというとベテランのほうが多い。

教育がどう変わっていくか、保育がどう変わっていくか、主体的・対話的で深い学びについて話す時には、できれば、若い先生たちに教育の面白さを知ってもらう機会があったほうがよいと感じている。

○ 今、小学校では授業改善を進めているところであり、教師主導にならないように考えている。

○ 保育の現場でも、若い人は新しいことをどんどん学び、こどもが主体となるような学びを保育でしようとするが、年配の昔からいる先生がそれを潰してしまう現状が結構あるのではないか。

○ 平成元年に学習指導要領や幼稚園教育要領の改訂の際に、教育観、こども観は変わったが、全体的には広がらず、小学校の先生も教科書をきちんと教えることがよいと思っている人が多い。ただ、皆に、教科書で一斉に同じ時間に同じことを同じようにできるのは限界があり、不登校、行き渋り、いじめなども起こっている。早生まれの問題というより、色々なこどもがいて、そのこどもに合った保育・教育をどういうふうにするのかが架け橋の肝である。そうすると、一人一人が生き生きと、園であろうと学校だろうと自分の居場所があり、そこで学ぶことが楽しいと思えるような授業・保育をどうするかについて押さえておかないといけない。

授業が変わる、保育が変わる、こどもが楽しく自分の意見を出し、友達と関わって相談し、探究的な活動が増えていくことについて、小学校の先生、教育委員会、福祉部局、みんなで広島のこどもが育っていく保育・教育をどのように実現していくのかを考えていかなければならない。その投げ掛けもないままで、連携をやってますと言うだけでは授業も保育も変わらない。やはり、できれば小学校に「学ぶとはどういうことか」について考えてもらい、幼児期に園で育てることは、こどもを座らせることや文字や数を教えることではなく、自分が生き生きしていることで探究する力をつけていくことであることを明らかにしていきたい。また、それが大事だということは入園前の保護者にも言わないといけない。保護者は、探究型の授業といっても、「何故、教科書で教えないんですか」となる。学校が苦しいのはこどもに社会性が育っていないことや、親がアウトソーシングでサービスの施設に預ければいい、何かやってくれればいいと慣れてしまうことで、結局、「学校が何もやってくれない」という話になってしまう。

様々な問題について、こどもから悲鳴が出ている。その悲鳴に対して何をどのように変えようとするのかについて、広島ของ皆さんが真剣に考えていかなければいけない。今変わらなかったら、多分変わる機会はあまりない。先生・保育者になる魅力も少ない。こどもが生き生きしているまちづくりになっていかなければいけない。

過疎地は、こどもが生き生きしていなかったら老人ばかりになり、何十年後に町や村がなくなっていく。こどもに対して「生き生き」している所、元気な所には他から転入して来る。未来を生きるこどもに何を大事にしようとするのかを議論してかないと、下に行けば行くほどバラバラで、意見が違ふ、忙しい等になるだろう。

架け橋は、こどもにとって、学校にとって、園にとって本当に面白い、楽しいものである。小学校側では、幼児教育の考え方に触れると、学校の授業が楽しくなった、園側では小学校の先生と話し、授業・保育のやり方が変わり、探究のように調べ、色々なことをやりだしたなどの好事例を通して、面白さを見つけ、どのようにアプローチしていくかを考えないといけない。文部科学省が作成した「幼児期に本当に大切な学びって何ですか？」の動画では、「これからの教育は変わっていきますよ、その基礎を作るのが幼児期の遊びですよ」といった説明がなされており、これだけでも共通理解したほうがよく、「保護者にも見せたい」とリーダー的な立場の人が思っているといふと保護者に伝わるものも伝わらない。広島市のこどもをどう育てていくかという話だ。

東広島市では、「よこはま保育・教育宣言」のようなものを作成しようと、関係課の課長、園関係者、小学校の先生、学識経験者、などが20人くらい集まって検討している。

今まで待機児童が10人いると、保育施設をつくれればよかったが、こどもの数が減り、園が潰れるみたいな状況もある中、「園の保育の質が高まる」、「こどもが育っているとはどのように考えるのか」について議論しておかないといけない。本当に一人一人のこどもが育っているのかをどう判断するのかについて横浜でも結構議論した。各園にアンケートを取り、5年計画の子育てプランの中で、「よこはま保育・教育宣言」をやっていますか」と尋ねた。園で話し合い、多くの先生が「やっている」と思ったら「○」、半分位なら「△」、やってないと「×」となる。他の項目からも実際にやってるかどうか分かるようにした。それぞれの園が、今年よりも来年、来年よりもその翌年に向かって、よりよくなるよう、こどもの話をし、動いていく。それぞれの園がよりよい方向に向かっていくために行政に何ができるかを考えていくことを、横浜で取り組んでいる。広島市もどのように実現していくのか、教育委員会、福祉部局で考えていくことが大事だ。

- 架け橋をやっている小学校は、行き渋りと不登校がなくなったと聞いている。それぞれのこどもの居場所をつくってあげていた。あと、人に対しての思いやりが育ってきた等の話を聞く。学校という枠の中に当てはめるのではなく、それぞれのこどもに居場所がある。先生の関わり方によって、学校が変わることを、目の当たりにする。広島でも好事例が沢山あるはず。そういうことが本当はこどもにとって大事なことなんだという考えに行き着くために、何をしていくか。是非、検討を進めて欲しい。
 - 今年は、「広島市教育大綱」の改定となる。教育大綱に乳幼児のことが書いてあるが、具体性に乏しい。例えば、「広島市教育大綱」を読み解くような形で、広島市の乳幼児期にはこういうことを目指そうというものを、横浜市のようにできるとよい。是非、検討してほしい。
 - 横浜市で作成した幼保小接続に係る冊子には、「こどもの話をしましょう」、「なぜ、こどもが夢中になっているのか」、「どのような環境があればよいのか」等、話し合い、もっと深めていこうという内容で、「横浜市教育大綱」と「よこはま保育教育宣言」も入れている。無藤先生のコメントもあり、「架け橋に大切なことは何でしょう」という問いに、無藤先生は、「一言で言えば、こどもにとって楽しい、面白い、有意義な学校にしていくということです。こどもがすることの面白さを見つけていく、見つけること、それが架け橋の肝です」とあり、架け橋の取組をすると、こどもがやること、こどもが言うことが面白い、関わるのが楽しいとなっていくとよい。
- 高知県には架け橋に関するの総括の動画がある。その後半部分、1年生を久しぶりに受け持ったベテランの先生が話す様子がある。こどもが朝から「歌おう」、「猛獣狩りのゲームをやろう」と提案してきて、「こんなに教えることがあるのに」と思ったけれど、こどもの望むゲームをすると音楽でよく歌うし、意欲的に漢字を教えてと言ってくる。こどもは、やりたくなったらこんなにや

るのだと感じた、こどもに委ねたら、力を発揮するし、学びたがるのだと感じたコメントをしていた。

また、文部科学省が作成している動画のうちの一つ、泥団子の動画では、自園の4歳児が一生懸命、試行錯誤している。動画ではこうやって工夫し、学びの芽が育ってるということを知りやすく示している。こどもは面白い、小学校の先生も含めて、そういう学校にしていこうという思いをもってほしい。

- 他の御意見にあるように、広島市としてというところを考えていきたい。自園でも、小学校と近隣園に来てもらい公開保育を行っている。事後のカンファレンスはとても大切だと感じている。こどもが必死に遊ぶ様子を見た後のカンファレンスでは、色々な遊びが学びにつながっていることを小学校の先生に実感してもらうことができた。園も言葉で丁寧に説明をしていくことが大切だと感じる。小学校の先生から、「本当はもっとじっくりと付き合いたいけれど、時間が足りなくて」などの悩みも出され、小学校の先生にも一生懸命に考えてもらえていると感じた。保育や授業を見合う中で、園が大事にしていることを伝えていくなど、話し合いの機会を大切にしたい。

説明にあった、「架け橋期のコーディネーター」についてとなるが、協議などの際に架け橋期の視点、小学校との学びのつながりについての示唆ができる人材の育成は大切だと感じた。